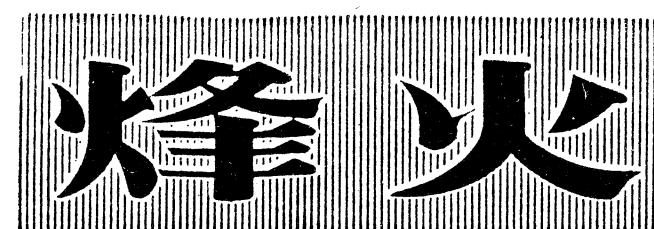


帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1978年  
5月15日  
第316号  
編集発行人 高木一夫  
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31  
とみやビル15号 (06) 371-3706  
■ 東京 新宿北郵便局 私書箱 2018号  
■ 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

# 階級最深部から決戦へ？



「出直し開港」粉碎に1万5千

七八年春期攻防は、今日の日本階級闘争が逢着する革命の重要な諸問題を、日本プロレタリア人民の前に鮮明に引き出しつつある。その基軸は、蜂起前夜—プロレタリア社会主義革命前夜の時代における、当面する革命的政治的任務である。全プロレタリア人民は、開始された闘いの新たな局面を、ブルジョア独裁の下に打ち倒さんとする帝・社帝の中間連合政府—官僚的警察的独裁支配の攻撃と死力を尽して闘争し、前方に推し進めるべく革命的実践を創出しなければならない。

見据えるべきは、今春期闘争に示された階級闘争の直面する二つの事態である。我々は今年初頭来、一方における、社帝・右翼日和見主義による労働運動の帝国主義的労働運動への封殺、他方における、被抑圧人民の個々の階級闘争の決起と自然成長の最終局面への逢着、として明らかにしてきた。この事態は、絡みあいながら、日本階級闘争が全体として共通に突破すべき、革命の準備期の問題を、革命的プロレタリア人民の前に手に触れんばかりに示している。今春期攻防は、この革命的プロレタリアートがしっかりと踏まえるべき階級闘争の現実を、より一層はつきりとプロ人民の前に引きよせた。

三・二六一二七、「史上空前の万全警備」と銘打った政治警察、機動隊一万五千名を動員した、日帝による予防反革命攻撃、現地戒厳体制、重点防備を打ち破り、三里塚開港阻止決戦攻防は、「蜂起的状況」を三里塚現地に現出せしめた。これは革命的プロレタリアートにとって、いかなる経験と任務を明らかにするものなのか。

第一に、現出した「蜂起的状況」の性格は何か、である。はつきりとさせておかねばならないことは、「蜂起」とは、例え「小さな人民蜂起」であれ、「社会革命の事業であり、勤労者の完全な政治的経済的解放を

社共の反革命制圧を突破し、武装蜂起の序幕戦きりひらけ！

三里塚空港粉碎！ 新治安立法粉碎！

めぐる事業」へと推し進められる可能性を持つものであり、決して戦闘規模の大きさで決定されるものではない。その局地性という規模はどうあれ、三里塚攻防は、未だ「反帝国主義」とその戦闘的突出と未分化である。にぎくてたむきだしの暴力支配、中間連合政府攻撃下での階級闘争全体の鎮静化に抗して切もかかわらず、ブルジョア共和制の外被を脱本主義の根底的危機を背景として、権力問題を急速に先進的プロ人民の前に突き出さずにはいられない。その意味で、三里塚現地を炎で包み、見事に日帝の三・三〇開港攻撃の破綻を切り拓いた「蜂起的状況」は、「政府に対する孤立した攻撃」としてしか先進的プロ人民を結集せしめ得なかつたにもかかわらず、「武装蜂起の序幕戦」へと転化する萌芽をはらんだ闘いである。

第二に、この背景に存在する闘いの成熟は何か、である。被抑圧人民の個々の階級闘争の最高峰として、三里塚闘争が、農民の民主主義闘争の自然成長を、「反帝国主義」に前進せしめたことを、我々は鮮明にしてきた。五・六反革命非合法攻撃に対峙しつつ、強力に進められてきたこの持続は、△武装蜂起の機関△△△プロレタリア独裁の機関△△△と發展するソヴィエトの萌芽を生みだす成熟を切り拓きつつある。これを支えるものは、三点である。(1)帝・社帝との長期にわたる闘いと、社共と分裂した日本共産主義運動の前進との結合、(2)全人民的政治闘争を媒介とした農民と全プロレタリア人民の階級闘争との結合であり、ジエット燃料阻止を通じた組織労働者一千葉労働との共闘、(3)小農民的生産につけて、『反帝国主義』においては包みきれぬ新たな質をはらんで、『蜂起的状況』は切り拓かれたのである。

第三に、以上のことから、開港阻止決戦攻防が、日本階級闘争に占める今日の位置は何か、である。今日、全世界的な資本主義の根底的危機の煮つまりの中で、先進帝国主義心臓部において中間連合政府攻撃が、この危機をめぐる「資本主義の救済か、資本主義の打倒か」というプロレタリア人民の活動を、ブルジョア独裁の「別称」の幻惑につなぎとめんと打ちおろされている。「連合の時代」(総評富塚)のかけ声の下に、「企業の存続が雇用維持の条件」(日経連)という日帝の攻撃に呼応し、「安定政権樹立の基盤としての企業の労使協議の場の強化」(同盟)、「雇用の安定・拡大と賃金闘争の条件作り」(総評)等、社帝潮流の制圧の下、労働者階級の闘いは圧倒的に中間連合政府攻撃に支配されている。このような中で担い抜かれた三里塚

の最高峰として、三里塚闘争が、農民の民主主義闘争の自然成長を、"反帝国主義"に前に進めしめたことを、我々は鮮明にしてきた。

五・六反革命非合法攻撃に対峙しつつ、強力に進められてきたこの持続は、△武装蜂起の機関△△△プロレタリア独裁の機関△△△と発展するソヴィエトの萌芽を生みだす成熟を切り拓きつつある。これを支えるものは、三点である。(イ)帝・社帝との長期にわたる闘いと、社共と分裂した日本共産主義運動の前進との結合、(ロ)全人民的政治闘争を媒介とした農民と全プロレタリア人民の階級闘争との結合であり、ジエット燃料阻止を通じた組織労働者一千葉勤労との共闘、(ハ)小農民的生産につけて、"反帝国主義"においては包みきれぬ新たな質をはらんで、"蜂起的状況"は切り拓かれたのである。

時止の回士を上る事の段の

爆破隊は、アボルバードを除く他の部隊は、火薬庫に近づくことを許さない。

ドアズ前田画廊にての開催を人気の中開

の位置は、次の三点である。(イ) 攻撃と表裏一体に進行するブル  
暴力装置のむきだしの姿に対し  
法武装の重要性を引きづりだした  
(ロ) 全体の鎮静化を打ち破つて登  
場のプロの部隊をはじめとして、中  
攻撃に抗して闘うプロ人民の結集  
としての位置を更に鮮明にしたこ  
その中で日本階級闘争の只中に  
避的なそのさきの段階——ブ  
ラジオ及びその別称(中間連合政府)  
アリア独裁かという権力問題、計  
武装蜂起の精力的準備——をめぐる  
けたことである。△武装蜂起の  
における革命の重要な諸問題が  
人民の革命的実践のつぼの中  
へとその姿を浮かびあがらせは

休の洗成田新した全 日帝 ろまでとして「新東社帝潮つ次々と行きは中間タリアへの従けるも忘れている放一社本主義

い出し。そ  
「立法」に基  
團結小屋破壊  
ーブルジョ  
きている。一  
四・六衆  
京国際空港  
流（社共）  
と打ちあげ  
つくこの「」  
連合政府攻撃  
人民に対す  
僕を強要し  
のとして進  
てはならな  
そして思  
会主義勢力  
の根底的危

して、三田  
つく「犯罪  
壊が打ちだ  
アジーは、  
二・二八政  
議院、四・  
問題に関す  
の動員と連  
てはいる。

物件押収」と称する現地では、「  
わるされている。  
ギリギリのところ  
政府声明を皮きり  
一〇参議院での  
する」議員決議を  
合を推し進めつ  
「成田新立法」へ  
立法」制定の攻撃  
しての、全プロレ  
テア独裁支配の鎖  
「合意」をとりつ  
ある。  
ヨアジーは知つ  
たのだ。民族解  
剖、全世界的な資  
「帝国主義の最

第三には、大解釈、及び革命的プロ

の反革命非会員段使用形態”の前進は、鉢を引きだした専門部隊——そして空港警衛としての配属等、新しい反革命要素を露わにした

日帝一國家 爆發に示され 階級的憎悪と  
革命運動のア独裁に対するほど、そ  
ばするほど、危險な政治的い  
乱だけが、そ  
レーニン）。  
はなく革命闘争だ！」「民主  
処置を」等々  
らしている。  
な局面は、ア  
そして日帝一  
されたのである。  
攻撃の特徴  
てた治安立派  
いう、階級闘  
衆行動の最高  
こしたブルジ  
大を打ちおる  
破壊し、鎮撫  
第二は、開

開港阻止決戦 中間連合政府 ジョア独裁 人民の非合法 ことであり、 場した先進的 間連合政府攻 の一大戦場と とであり、(八) 「攻防の不可 ルジヨア独裁 か、プロレタ 画された武装 任務を投げた 前夜の時代／ で、次から次 じめている。

現行ブルジョア法の無制限な拡張。「新立法」をもつての、革命党人民への弾圧の徹底化である。部を中心とした決戦戦士に対する「遂罪」「航空危険罪」を頂点とする。決戦に決起した労働者への即死。一ジ、公務員労働者の年休・病

法攻撃の強化である。〃銃の前  
たるガス弾水平打ちから、闘い  
器の無制限使用のエスカレート  
千葉県警空港警備部隊の配置  
備の中核には自衛隊の指揮官と  
、侵略反革命軍事空港にふさわ  
塞として、三里塚空港はその姿

権力は、この開港阻止決戦の大革命的萌芽に対し、未曾有の歴史は物語つてゐる。ブルジョアジーが徹底した階級闘争が発達する恐怖をふるいたせている。「ブルジョアジーにとつて、危機、さこざの際に、虐殺、または内戦だけさし迫つたものなる」と、「もはや一部農民の反対闘争で、内戦に転化した」「内戦だ！内戦だ！」国家権力によつて、更に鮮明にされる。

の位置は、次の三点である。(1) 攻撃と表裏一体に進行するブル暴力装置のむきだしの姿に対し、(2) 武装の重要性を引きづりだした(3) 全体の鎮静化を打ち破つて登場するプロの部隊をはじめとして、中堅勢力に抗して闘うプロ人民の結集としての位置を更に鮮明にしたところ、その中で日本階級闘争の只中に「戦略的なそのさきの段階」——ブル及びその別称（中間連合政府）ニア独裁かという権力問題、計謀蜂起の精力的準備——をめぐるかけたことである。△武装蜂起の問題における革命の重要な諸問題が、人民の革命的実践のつばの中へとその姿を浮かびあがらせは

的階級の本格化

着と準<sup>シ</sup>  
革命  
熱の攻  
におい  
全国  
階級闘  
典制圧  
連合政  
主義と

後の時 革命党 るプロ 一切を る三里 的状況 ち破り 的に蜂 プロレ そして 主義労 勵労者 打倒か きつけ ブルジ るを得 「蜂 ートの つた。 りしほ いる。 の時を 化し、

休の洗成田新した全 日帝 杜帝潮「新東 これまでとして「新東 つ次々と行きは中間タリアへの従けるも忘れている放一社本主義

として、武装蜂起とプロレタリアの独裁的準備を開始せよ！今や革命的プロレタリア準備を開始せよ！とする先進的農民団結し、開始された『小さな人民蜂起』一齊アロレタリートの武装蜂起の序幕と大な闘いに、共に突入すべき時が訪れことを、肝に銘じよ文で懺ねぬか？

の準備期たるゝ武装蜂起の前夜の時代ゝて、当面する革命的政治的任務は、白防の中で鮮明に浮かびあがりつつある。のプロレタリアート戦士諸君！今こそ、争の全ゆる戦場深部から、どりわけ社下の労働者階級の闘いの深部から、中閻府攻撃勿齊に横行廟る経済主義・改良闘争も、現階級局面を突破し得る指導

代」が到来していることを、そして、革命的プロレタリアートの領導によるタリア階級闘争の発展だけが、この決定することを。今、春期攻防における塚開港阻止決戦の中で現出した「蜂起」は、階級闘争全体の鎮静化攻撃を打たれ、被抑圧人民の階級闘争の中から端緒を起とその機関—ソヴィエトの問題を、タリア人民の手に具体的につかませた。中間連合政府攻撃下を潤歩する帝国労働運動の抑制下から決起した、先進的に、「資本主義の救済か、その根本的」をめぐる権力問題を、その眼前に叩いた。この新たな階級的局面に、日帝—ヨアジーは死活をかけてたち向かわざない。

起の前にたたされると、プロレタリア敵の力は弱いこと」を、プロ人民は知る。日帝—国家権力は、中間連合政府—官僚的独裁支配のあらんかぎりの力をふり、これを「幻想」に封殺せんとして、そして、一方で、中間連合政府の破産見こし、自らをファシズムとして組織その反革命決起の時の一挙的逆襲を着

## 社帝制圧を突破し

### 労働運動の革命的再建かちとれ

開始された『武装蜂起の前夜』たる革命的激動——しかしそれはいまだその一步を踏みだしたばかりである。階級闘争の基礎的な戦場——労働運動の戦場はブルジョアジーの代理人たる社会帝国主義者に制圧されている。生

本労働者階級は自己を指導的階級として鍛え活破壊、合理化、首切り、倒産攻撃などに対し戦闘的闘いを広汎に生みだしながらも、日本階級闘争全体と個々の被抑圧被差別人民の闘争の領導者として全面的登場をかちとる点において決定的な立ち遅れをとつてゐるのである。革命的プロレタリアートはこの困難な任務を真正面からひき受けることなくして勝利することはできない。

我々は一切の闘争の成果、階級闘争の教訓を労働者階級の中に蓄積し、革命的プロレタリアートを建設していかねばならない。そして革命的プロレタリアートは、人民諸階級層の闘争を指導し、自らが全人民の闘争を武装蜂起——プロ独の勝利へと統合してゆく指導的前衛的任務をになわねばならない。労働運動において、もはや問題は経済闘争の戦闘的展開や、組合主義的政治闘争を新たな装いをこらしてなすことでは決してありえない。日本階級闘争がつきあたる逢着点の革命的突破のための単一の任務は「中間連合政府か、蜂起・プロ独か」という権力問題の大膽な提起であり、この見地に立脚した断固たる労働運動指導である。

開始された『小さな人民蜂起』をレーニン主義武装蜂起へと統合すべく全精力を投入すること。そして、社帝・右翼日和見主義との路線闘争を、樹立すべき権力の問題を焦点として貫徹し、わが大胆な宣伝・扇動・組織化の展開によって武装蜂起——プロ独にむけた革命の武装せる伝導路を、プロレタリア階級の深部に無数に構築していかねばならない。さて、そのための条件は七八春闘過程をおしてどのように成熟してきているのか。

七八春闘は、従来の『春闘構造』の形さえもつき崩された「相場なき春闘」であり、また不況を口実として賃上げの低額へのおさえ込みをはかった露骨な「政治春闘」であった。つまり日本資本主義の経済的危機を前にして日帝ブルジョアジーは、労働者人民の強搾取強奪によってこれを乗り切らんとし、かつてない決意をもって、あからさまな政府とブルジョアジーの強固なブロックを組んで、春闘の「抑えこみ」をねらったのである。

これは第一に、賃上げ額からいつても物価上昇率を下回り、実質賃金の低下をまねくものであり、労働者人民の生活苦、首切り、失業などを増大させるものであった。しかし決

してそれだけではない。

第二に日帝ブルジョアジーは、単なる賃金額の増減にとどまらず、賃金決定機構そのものの再編をおこなわんとしているのである。従来の春闘を回路とし鉄鋼相場をテコとした低賃金——強搾取・強収奪機構と、国家権力を表にださない日本型所得政策をふみ固めたうえで、彼らはこれを基盤に「相場なき春闘」「業績にみあつた賃上げ」をうちだし、労働力の産業間移動をも調節するものとして再編せんとしているのである。

第三に「オイルショック以降労使関係は乱れに乱れていた。今年はやっとその正常化の第一歩を踏みだした」(四・二五土光経団連会長)といふ日帝ブルジョアジーの勝利宣言は、春闘における民同などの「力不足」「戦術・方針の誤り」が敗北の原因であつたといふ総括を一蹴している。他方では七八春闘の敗北は、広範な労働者の既製指導部・民同社共とその路線への反発と、初步的批判を膨大に生み出している。日帝ブルジョアジーの方が、労働手代どもよりもはるかに「階級的」であり、資本の支配の枠内での労働組合運動をこえんとするいささかの要素をも彼らは、各個撃破せんとつとめた。

政府ブルジョアジーによる公企体民営論なども動員した總がかりの「公労協包囲シフト」

は日本資本主義の救済の道にプロレタリアト人民の決起をひきこまんとし、「日本資本主義の危機打開のための消費の拡大」「賃上げ」をかかげ、また雇用、減税、時短、最賃など年までの総評富塚とのパイプの切断と「政労交渉」拒否、これらはブルジョアジーの断固たる決意のあらわれであつた。

もちろんこれらの攻撃は、社会帝国主義の屈服、協力、加担ぬきではありえない。彼ら

は日本資本主義の救済の道にプロレタリアト人民の決起をひきこまんとし、「日本資本主義の危機打開のための消費の拡大」「賃上げ」をかかげ、また雇用、減税、時短、最賃など年までの総評富塚とのパイプの切断と「政労交渉」拒否、これらはブルジョアジーの断固たる決意のあらわれであつた。

これらに對して右翼日和見主義諸派は、口先での社共批判の陰で、実は権力問題を射程にのぼせた現下の階級闘争の逢着点のつきつける主体的任務から、プロレタリアート人民の眼をそらせん役割を果たしてゐるのである。彼らのうちある者は「人民の政治的活性化をおじとどめる既成左翼」と社共を免罪し、労働者の闘争を「本工主義の思想的脱却——本工主義との闘争」におじとどめ、また「改良的課題の実現そのものが日帝打倒によつてしか実現しえないのである」と言いつつ、改良闘争の戦闘的実現を日帝打倒といつわり、労働者階級の決起を帝国主義ブルジョアジーの政策的諸結果に対する闘いに封じこめんとしているのである。

より巧妙に体系化しているのが四トロにはならない。彼らは「三里塚春闘」と称して労働者階級に、日帝の開港攻撃との闘争への結集を呼びかけはした。しかしそれは、諸闘争の横断的結合と「反福田、生活防衛」の路線にもとづくものであり、さらにそれを「政府権力にむけて闘い抜くことのできる新たな主體条件の形成」とデマつてゐるのである。が、かかる彼らの「権力への闘い」こそまちがいなく階級闘争の現在的成熟をブルジョアジーの政府交代に封じ込め、それをゼネスト——社共政府として展望するものであり、かつまた三里塚闘争を「社共労農政府」のもとに売り渡すものなのである。

#### 労働者の同志諸君！

これらに対し、確実に労働者階級人民の憤激と決起は、労働手代どもの思惑をこえて、階級深部から活性化している。生活苦、合理化、出向、配転などに対する不満の増大と、それらに対し露骨に忍耐を強制し、希望退職の肩たたきをする労働代官への批判の増大として、また企業倒産、解雇攻撃に対する企業占拠、自主生産などの反撃、労働運動への刑事弾圧に対する闘争の拡大として、さらに三

里塚闘争を頂点とする全人民的政治闘争への決起として。

革命的プロレタリアートはこのような闘いを、とりわけ三里塚闘争を頂点とする革命的政治闘争への結集・連帶の組織化、さらにその総力あげた解雇攻撃に対する反レッドパートの闘争の組織化、また合理化、失業・倒産攻撃に労働組合結成をも含む闘いを指導し、プロレタリアート人民の闘いと組織を武装蜂起―プロ独の路線と組織に結びつけていかねばならない。これらの戦場は社会帝国主義者の牙

全世界的に突入した帝国主義の「最後の破局」の時代における、革命と反革命のしのぎを削る闘いとして、くり広げられた。我々はこのことから「瞬たりとも、目をそらしてはならない。

民族解放―社会主義勢力の歴史的勝利によって切り拓かれたヤルタ・ジュネーブ体制の最終的崩壊。七五年を画期とするこの新たな時代の到来の中で、国際階級闘争の前進は、

先進帝国主義心臓部における武装蜂起―プロレタリア独裁の実現を、世界革命に決起するプロレタリア人民の勝利の次の一步として鮮明とした。帝国主義間対立は社会帝国主義をも巻き込んで激成し、帝国主義・社会帝国主義は、互いに抗争しながら連合し、死活をかけてこれを押しとどめんとしている。ランブイエ国際会議以降の事態は、これを人為的に回避せんとする、帝国主義の存亡をかけた空しい「協力関係の強化」の呼号に他ならない。そしてそれは、次の日再びの反目といがみあいに取つて変わるものだ。

今や帝国主義は、この出口なき矛盾と危機の内部で、むきだしの侵略反革命攻撃を推し進めている。それは、第一に、侵略反革命（同盟）の強化による、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国への新植民地支配の維持・拡大であり、第二に、帝国主義間の通貨・通商・資源をめぐる強盗戦争において、より有利な地位を確保するための市場争奪戦であり、第三に、自国内労働者人民の憤激を鎮静化し階級闘争総体を圧殺し、ファシズムを準備することである。

だが、これらの攻撃は単線的に進み得ない。帝国主義ブルジョアジーは、帝国主義間の世界戦争が、一直線にプロレタリア世界革命の道につながる歴史的根柢を自覚している。だからこそ、帝国主義者は、社会帝国主義の育成と連合の下に、プロ人民への「最後の平和幻想」の流布を、第二次世界大戦時における社会排外主義育成を上まわる巧妙さをもつて、

城で彼らを労働運動からたき出すという困難で重要な戦場である。労働組合とその闘いを、排外主義と「産業報国会」に売り渡すのか、あるいは「革命の学校」へと転化させるのかは、武装蜂起―プロ独の勝利にとって決定的だからである。かかる闘いをつうじて我々は、武装蜂起―プロ独の司令部としてうち鍛えられた非合法細胞を中心にして、無数の武装せる革命の伝導路を労働者階級のもつとも奥深くに必ずや建設しなければならないのである。

## 階級最深部から 春期革命的政治闘争を組織せよ



武装蜂起前夜をめぐる今春期攻防は、全世界的に進めていた帝国主義と社会帝国の時代における、革命と反革命のしのぎを削る闘いとして、くり広げられた。我々はこのことから「瞬たりとも、目をそらしてはならない。

全世界的に進めていた帝国主義と社会帝国主義の連合による、革命党と革命的プロレタリアートの路線と組織そのものの破壊と、中間連合政府攻撃の下への統合こそ、同時に進行している事態である。

今春期攻防が示す通り、帝国主義の世界的危機の深まりと共に、日帝心臓部においても

武装蜂起の前夜の時代たる革命運動の本格的激動期が到来しつつある。鮮明としてきた日本階級闘争の直面する二つの事態は、今日の、帝国主義がいづれ訪れるであろうフェシズムの時代を着々と準備しながら、社帝を巻き込んで平和と改良の幻想中間連合政府攻撃を一段と激化させる時代の真っ只中にあります。時代を画するこの攻防の中で、帝国主義に武装された革命的政治的決起を切り拓き、人民の闘いの全ゆる戦場と労働運動深部から、武装蜂起とプロレタリア独裁の準備への本格的着手を開始する我々の歴史的任務は、いよいよ重大である。

では、この勝利はどのようにしてプロレタリア人民の手にかちとられるのか。前章において、我々は今春期における日帝ブルジョアジーとの攻防の性格をはつきりとつかみだしてきました。ギリギリのところまで発動される壮絶なまでの日帝の中間連合政府官僚的警察的独裁支配の攻撃に対する、プロ人民の歴史的対決を横道にそらさせ、これへの合流へ行きつかせんとするものは誰か！開始された「小さな人民蜂起」を、プロレタリアートの全国一齊武装蜂起、プロレタリア独裁に至る序幕戦とするために、現下の階級局面を前進させるのは誰か！一切の戦闘的突出性、戦術的前衛性の裏に存在する、この歴史的任務をめぐるプロレタリア内部における激しい闘争に傾注せよ！今や、中間連合政府攻撃をめぐる歴史のふるいが揺れ動いている。日本階級闘争の只中に登場した、人民蜂起とソヴィエトの萌芽をめぐって、攻防の不可避的な次の段階へと、革命と反革命のしのぎを削る闘いがくり広げられつつある。

中間連合政府攻撃の急先峰たる社共を中心とした社帝潮流。彼らは、帝国主義の露ら様な「治安立法」制定に異論を唱えている。中身は何か！それは、現行法による取り締まりの強化、即ち「資本主義救済のための秩序維持」の強化によって、革命を充分に圧殺できるとの表明である。この使命に従つて、「過激派対策」と称した革命党・革命的プロ人民への破壊弾圧に手を貸し、六七年三里塚闘争から叩き出された日共を一方の翼として、「話し合い路線」なる組織破壊・闘争壊柔攻撃の水路を導かんとしている。他方で、「危機打開・生活擁護・雇用保障」等を掲げた労働者階級全体に対する資本主義の救済の強要是、開始された新たな階級的局面が階級闘争全体の発展へと成長することを阻止し、「小さな人民蜂起」を政府の改良的施策に対する抗議闘争へと封殺するものに他ならない。この改良政府の幻想によって、プロ人民をブルジョア独裁の別称たる中間連合政府の下に縛りつけんとする社帝潮流は、帝国主義主要路線の擁護に基づく反革命本性を成長させ、發揮するのだ。

中間連合政府攻撃の隠然たる合流者―右翼日和見主義。三里塚開港阻止決戦の戦術的前衛を担った四トロをはじめとする右翼日和見主義は、自らが切り拓いた闘いの客観的位置と、彼らの路線的立場の深刻な矛盾を明らかにせざるを得ない。「生活防衛の実力闘争か企業防衛の道か」を掲げる彼らにとって、決戦阻止攻防は、政策阻止闘争の戦闘化としての大衆実力闘争であり、体制内抗議闘争の延長としての開港阻止である。その行きつく先是、「福田自民党政打倒」と称したブルジョア独裁内部における政権交代劇である。彼らの言う「権力問題」とは、力学主義的なブルジョア政党の議会勢力に基づく、社共の中間連合政府への依拠に他ならない。権力問題から、「階級としての搾取者を暴力的に圧迫する独裁の不可欠の条件」（レーニン）とその準備を抜き去ろうとするものこそ、ブルジョアジーの手代として、改良政府へと行きつくるのである。現に開始された人民蜂起とソヴィエトの胎動を、彼らはこのような改良政府へと流産させ、今日の労働者階級の歴史的任务を、「生活防衛と、その農民の最高峰―三里塚廃港」へと切り縮めるのである。「改良主義的労働官僚との闘い」「社共を解体する闘い」の外被を取り去れば、プロ人民の自然発生的憤激の戦闘性を、プロレタリア階級が戦取すべき一切の武装であるとして、プロ人民をブルジョア独裁に縛りつける右翼日和見主義の、社帝潮流に対する不平と、その表裏一体の合流ぶりが露わになろうというものである。

そして、中間連合政府攻撃の「左」翼補完物として、その戦闘性の基盤すら喪失し、右翼日和見主義に対する闘いにおける日和見主

義を拡大する急進民主主義。自然発生性の「左」の抨撃主義者である彼らは、『反帝國主義』の闘いとその團結形態を、そのままソヴィエトの萌芽であると吹聴することによつてもはや闘いの領導軸を戦術的突出性・多様性にしか見出すことができない。その掲げる『労農同盟』とは、五・六以降の三里塚反撃闘争の大きな軸を占めた、反対同盟と千葉労働者との結合を、未だ戦術共闘としてしか領導し得ていないことにも見られる如く、『反帝國主義』の闘いを中心とした諸闘争の横断的結合の延長上に、武装蜂起を展望する急進民主主義革命路線である。これによつては、今日の中間連合政府攻撃下における日本プロ人民が突破し、革命の準備へと統合すべき、階級闘争の直面する二つの事態をめぐる、帝国主義・社会帝国主義、そして右翼日和見主義との、△プロレタリアートの武装蜂起→プロレタリア独裁→へと至る長大な闘いを、領導することはできないのである。

次々と引きだしつつある。このような一時代のなかで、我々は、今春期攻防における革命的政治的任務を断固として担い抜かねばならぬ。い。

第一に、三里塚「五月開港」<sup>開港</sup>を粉碎し、開始された三里塚の「小さな人民蜂起」を日本におけるプロレタリアートの全国一齊武装蜂起の序幕として推し進めることである。日帝は、五・二〇開港強行を、アジア侵略反革命同盟の盟主としての使命をかけて行わんとしている。「成田新立法」を一步とする破防法攻撃と対決し、非法合組組織に裏打ちされたソヴィエト・リーダー蜂起の機関、プロレタリアア独裁の機関の萌芽を成長させ、プロレタリアア人民のものとせねばならない。

らは何を物語っているのか。全世界的に吹き荒れる中間連合政府攻撃下における、権力問題は、新たに開始されんとする局面を、中間連合政府へと引き入れるのか、それともブルジョア独裁をプロレタリア独裁へと革命する巨大なプロレタリア人民の武装蜂起に至る闘いへと引き入れるのか、として存在している。既に、プロレタリア人民は、その本格的準備を開始する時にきている。改良政府を掲げた一切の中間連合政府の手先どもから、プロ人民を引き離さなければならない。

今やブルジョアジーは、侵略反革命（同盟）を強化しつつ、帝国主義間強盗的抗争をおし進め、自国内階級闘争の鎮圧とファシズムの準備に邁進すべく、中間連合政府—官僚的警察的独裁支配の攻撃を徹底してプロ人民に打ちこんでいる。そして、資本主義の危機と共に深まる階級闘争の激化、プロ人民の大衆行動の発展と、密集した帝・社帝の反革命攻撃は、プロ人民の前進すべき道と、その条件を

義的任務をかけたプロ人民の政治的任務とし  
て組織することである。「返還」より七年目  
を迎える沖縄は、米・日・韓を結ぶ侵略反革  
命の前線基地・軍事拠点としての性格を今日  
ますます増大させている。琉球処分以来百年  
の沖縄人民の差別抑圧の歴史にたって、日帝  
は再び沖縄人民の侵略反革命戦争への動員を  
進めている。沖縄解放同盟を先頭にした七・  
一七を頂点としたこれとの対決に連帶し、本  
土一沖縄を貫く安保一沖縄闘争の大爆発を、  
今春期攻防と結合させ、搖ぎなく組織しなけ  
ればならない。

第三に、昨八・九最高裁による上告棄却以  
降、東京高裁＝四谷の証拠破棄、再審早期棄  
却攻撃との緊迫を深める狹山闘争勝利、石川  
氏奪還の闘いである。「日本の声」を筆頭と  
した部落解放闘争のブルジョア的改良要求闘  
争への歪曲と、狹山闘争解体攻撃を許さず、  
狹山再審闘争の前進と勝利を切り拓け！

第四に、社共制圧下の労働運動における階  
級深部からの労働者の政治的革命的決起を作  
りだす闘いの強化である。社共・民同・同盟  
指導部の資本主義救済・帝国主義主要路線の  
擁護のブルジョアジーへの合流路線を暴露し  
労働者の怒り・不満・反抗を、ブルジョア独

裁をプロレタリア独裁に革命する闘いへと領導する水路を切り拓き、それを組織化する非法活動と能力を作りあげなければならぬ。これらの任務を中軸に、無数のプロ人民の革命的政治的決起を創出し、階級深部において武装蜂起とプロレタリア独裁の準備を開始せよ！我々はそのために、革命党と固く結合した『革命の伝導路』を創出するために全力を尽くすだらう。日本階級闘争の現状を根底から変革し、登場しつつある革命的萌芽の不完全さ、雑多性、自然成長性を、中間連合政府攻撃から防衛し、はつきりとしたものに見えるために、この『伝導路』を通じた革命的政治闘争のプロレタリア人民内部への持ち込みを強力に推し進めるだらう。

ソヴィエト主義者は人民の闘争組織の最高の形態たるソヴィエトの世話役に党的任務を解消し、スターリン主義者は党を国家機構に溶解させることによつて、帝国主義への屈服の道を歩んだ。現代過渡期世界において、私は今日の段階から、世界革命の実現と階級の廃絶に至るまで、独裁権力によるブルジョアジーの鎮圧と収奪、プロレタリア階級闘争の領導を担い続ける党の人民指導の血液として、『革命の伝導路』を建設するだらう。このことによつてはじめて、人民の闘争組織であるソヴィエトは、△武装蜂起の機関▽△プロレタリア独裁の機関▽へと発展し続けるのである。そしてこのことによつてはじめて、帝国主義・社会帝国主義・右翼日和見主義の絡みあつた、プロ人民をブルジョア独裁支配につなぎとめる中間連合政府の攻撃との、長大な死闘を、全ゆる条件の変化に耐え、切り拓くことができるのである。

先進的プロレタリア人民諸君！我が反帝戦線（全国委）と共に、今や革命的プロレタリアートとして踊り出んとする先進的人民と団結し、全国一齊プロレタリアートの武装蜂起の序幕へと、五一六月闘争を切り拓こうではないか！

殺人罪デツチあげの最後の切り札  
ウノ沢・及川証言を粉碎せよ！

# 10・9 反革命加納一派完全打倒闘爭・控訴審

おどろくべき陰謀が画策された。公判闘争における殺人罪デッチ上四月十二日は、当初判決公判として予定されていた。だが検察は、判決公判の直前の四月七日になつて突如として新たな証人申請をおこなつてきた。

この新たな証人申請こそ我々のめたものこそ、三・二六開港阻止謀を、日帝＝検察をして決断せし

げ粉碎の闘いの勝利的遂行の中で、このままでは殺人罪が成立しないと判断した、検察の起死回生のデ

ッチ上げ陰謀なのである。この陰謀を、日帝＝検察をして決断せし

たな陰謀の裏には、三・二六決戦に示された、革命党とプロ人民の底力への日帝の限りない恐怖と、  
ブルジョア法の論理整合性など一切無視して、革命党と先進的闘いの破壊のためには、どのような手段でも行使するという反革命非合法攻撃の質がはらまかれているのだ。

四月十二日の公判において、デ

ッチ上げ証人福永（警官）はすさまじい証言をおこなつた。第一のペテン。福永が、最初に久松（加納英二）宅で小西と接触した。第



ついにやったぞ！

# 三月開港を粉碎す！

3·26~4·2

擊せん！

決戦は、三月二十五日横堀要塞に戦をもって開始された。ふたたび要塞の上には、鉄塔が建設され、反対同盟北原事務局長、石井武氏、秋葉哲氏をはじめ、たたかう労働者人民は、要塞にたてこもり、機動隊との攻防戦に突入したのである。

十六日、正午、  
全国から現地繪  
力結集した二万



炎に包まれる空港！ 進撃する反帝戦線！

言を、一言も聞きもらさないとい  
う緊迫した空氣に満ち、片平氏と  
共にたたかうのだという決意をこ  
め「異議なし」で発言の一言一言  
にこたえ、固い連帶をかちとった  
のである。

的話し合い路線の本質を鋭く粉砕

「敵運動の再建をたたかいとする」という表明をうけ、集会をしめくくつて反帝戦線の同志が発言に立った。同志は「四・二八を突破口とする今春期闘争を、帝・社帝打倒／右翼日和見主義粉碎／中間連合

ピールを集会に寄せた。  
最後に諸戦線からの決意表明が  
おこなわれた。学生を代表して京  
都洛北戦線Ｓ大支部から「当局  
右翼自治会一体となつた学内暴力  
支配と対決し、五・二〇開港阻止  
決戦へ全学の学友を領導する」と  
決意が表明され、労働者を代表し  
電通労働者政治委員会から「社共  
・民同の制圧を突破し、革命的労  
働運動の再建をたたかいとする」と

塙開港阻止決戦の大爆發は、帝國主義の延命と侵略反革命の成否をかけた三・三〇開港を葬り去った。全国の労働者人民諸君！

におよばんとする労働者人民は、三里塚第一公園を埋めつくし、絶え間ない激戦をつづける横堀要塞、死守戦と固く結合し、決戦勝利の烽火をうちあげたのである。反対同盟を代表して戸村一作委員長は、三里塚のたたかいは世界革命につ

ますます意氣軒昂であります。社  
会党・総評をもまきこんだペテン  
的詰しあい路線の本質を鋭く粉砕  
し、一切の闘争破壊、切り崩し攻

徳運動の再建をたたかいとする」という表明をうけ、集会をしめくくつて反帝戦線の同志が発言に立った。同志は「四・二八を突破口とする今春期闘争を、帝・社帝打倒！右翼日和見主義粉碎！中間連合政府攻撃粉碎！武装蜂起—プロ独

拳に対しても断固としてたたかい  
抜いておれます」という力強いア  
ピールを集会に寄せた。

最後に諸戦線からの決意表明が  
おこなわれた。学生を代表して京  
都洛北戦線S大支部から「当局一  
右翼自治会一体となつた学内暴力  
支配と対決し、五・二〇開港阻止  
決戦へ全学の学友を領導する」と  
決意が表明され、労働者を代表し  
電通労働者政治委員会から「社共  
・民司の制王を突破し、革命的労  
したのである。

二〇を頂点とする今春期のたたか  
いを先進的労働者・学生を牽引し、  
たたかう」と高らかに表明した。  
この決意とたたかいの革命的指針  
を集会参加者全員が固く確認し、  
スローガン採択、一大シニユプレヒ  
コールとともに、四・二八闘争を  
圧倒的な決意と熱気のうちに貫徹

その偉容をい  
かんなくあき  
らかにしたの  
である。

機動隊を全国からかり集めただただ物量のみを頼りとし、現地戒厳体制をひいた日帝＝公団はこの時、完全に横堀と第一公園にクギづけにされていたのである。



## 管制塔占拠の報告に注目

「空港管制塔がただいま、たたかう戦士たちの手によつて占拠されました。管制塔には赤旗がひるがえつております」との緊急報告がおこなわれた。会場一帯は大歎声につつまれた。管制塔占拠・破壊の勝利の第一弾をうけて、空港を文字通り炎で焼きつくす大デモンストレーションが貫徹され、三・二六闘争は歴史的たたかいの実現をもつて幕を閉じたのである。

こうして、日帝国家権力の国家的威信をかけた三月開港策動は、全人民の力によつてふたたび三たび爆碎された。

わが反帝戦線（全国委）は、三〇一号路線を戦取して以降、首尾一貫して、三里塚闘争を蜂起——口獨の大通へと領導せんとたたかいつねしてきた一切をかけて、この攻防をないきつた。「開港阻止／空港粉碎！」という日帝の開港

のもとに、全国のたたかう労働者人民の総結集をかちとること、そして、そのただ中で武装蜂起の序幕をきりひらくべく、武装蜂起とプロレタリア独裁の機関『ソビエト』の萌芽を、『武装せる革命の伝導路』の建設をもつて成長・發展せしめること——この革命党に対する階級闘争が要請する二つの任務を不可分一体のものとする見地に立ってわれわれは、たかにぬいたのである。

か現闘が存在する白旗部落において、敵権力の破防法——新治安立法——現闘小屋破壊攻撃をうち破り、

義』といふ自然成長の最高のレベルをこえて、新たなたかいで進まんとしている。三・二六鬭争をおおしてたたかいの焦点は一気に鮮明になつた。開始された『小さな人民蜂起』を断固たるものとし、プロレタリア武装蜂起の序幕戦をきりひらくのか、あるいは中間連合政府—官僚的警察的独裁のもとに打ち倒されるのか——回答はこのいづれにしかないので。

三・四月現地連続闘争の渦中、われわれは現闘団の同志を先頭に精力的に宣伝扇動戦を組織し、わ

まとめと「もし」とせざたを投入し、不退を強行する覚悟でたしますし、重大局を図るも刻なもの

政府が、五月二〇日開港するならば、私どもは総力を再度一週間闘争を準備して再度転の覚悟でこれを阻止することをここに宣言し。また、政府がこのたび面から何ものをも学ぼうだひたすら治安強化だけのならば、事態が一層深になるのは明白であり、のすべては福田政府にあも明らかにしておかなくません」（四月十日づけ

さあ 空港にむけて進撃だ！

# 労働運動の深部に武装せる 革命の伝導路を構築せよ！

# われわれの労働運動基調

(上)

# ●共産同『階級的労働運動』の

## 革命的突破にむけて

### 第一章

#### はじめに

1

界に向けて、その行軍を不屈に領導しなければならない。

革命的プロレタリアートは、帝国主義打倒の闘いとしっかりと結合させて、社会民主主義者、スターリン主義者—総じて今日における社会帝国主義者とすべての日和見主義者打倒の闘いへとプロレタリアート大衆を決起させ、彼らを労働運動からたき出し、労働組合の団結とその闘いを、革命の学校、共産主義への予備校へと転化させねばならない。

世界の帝国主義本國—わが国における第二次大戦後の労働運動は、社会民主主義とスターリニズムに深く支配されてきた。彼らは労働運動を雇主との経済闘争に閉殺し、政府に対する改良の要求に、その政治的決起を閉殺してきた。帝国主義の超過利潤に群がる彼らは、

プロレタリアートの必然的闘争としての経済闘争と、その必然的團結形態たる労働組合を、ブルジョアジーとその国家権力の暴力と結託して支配し、いまやそれを、資本主義—ブルジョアジーとその国家の安全装置、安全弁へと変質せんとしている。労働組合への彼らの支配は、資本主義の根底的危機の不可逆的激化の中で、帝国主義の侵略反革命の今日的要たる「中間連合政府—官僚的警察的独裁攻撃」の重大な一翼を荷っている。

革命的プロレタリアートの党建設への決起に対する國家権力の反革命弾圧の走狗、排外主義育成の走狗、革命的プロレタリアートの陣営を内部から腐敗させるために、帝国主義が目論むカウツキー主義者、チブル民主主義者育成の走狗、これが彼らの今日的姿である。

帝国主義と社会民主主義・スターリニズムは、資本主義の救済、帝国主義の延命策、侵略・反革命のもとに、その強盗の結託を強化し、あらゆる日和見主義を自己のもとに屈服させ、利用し、もってプロレタリアートの武装蜂起—独裁、わが国のプロレタリアートの社会主義革命への勝利の大道に、その最後の対決をいどんでいる。

すべての革命的プロレタリアートは、マルクス主義の帝国主義下革命への偉大な適用—レーニン主義を、我々の生きるこの現代過渡期世界に継承発展させ、鉄のレーニン主義前衛党、中央集権非合法党を断固として建設しなければならない。プロレタリアートは今日こそ、全世界の人民と連帯し、その闘いのすべての成果を、自らの解放のための唯一の武器—レーニン主義世界党建設のためのわが国における闘いへと結集させねばならない。

すべての革命的プロレタリアートは、大衆の最も多くが参加し最も基礎的な階級闘争の戦場—労働組合とその闘いの深部に、中央集権非合法党の細胞を建設し、プロレタリアートの闘いを激励し、その前衛に立ち、敵を指示し示し闘いの進路を指し示し、獲得すべき世界に向けたのである。

この我々の「階級的労働運動」の実践と理論は、その優れたところも、誤ったところもある。その後の我々の労働運動に持ち込まれているのであり、更に幾つもの労働運動を口にする反レーニン主義党派の労働運動のワク組みとして利用されているのである。利用するものたちは、かつての我々の「階級的労働運動」の最も革命的な性格を切り捨て、その根本的な弱点、党建設におけるソビエト主義的解説から分岐せしめ、その闘いの総括を通して個別性、分散性を一步一步脱皮させ、革命的政治闘争へと領導し、武装蜂起—プロレタリアートの歴史的任務遂行のため、確実な、そして大胆な第一歩を踏み出そうではないか。

プロレタリアートをとりまく状況のすべては、堅忍不抜な革命的プロレタリアートの労働運動への決起を要求しているのだ。

2

#### 六〇年代前期、 「労研・社研路線」下での 労働運動

我々のこの闘いは、基本的には六〇年代中期に開始された。「階級的労働運動」と称されるそれは、日共「六全協」批判をもつて開始されたわが国における「新左翼」の登場、その中軸たる第一次ブンド以来の労働運動「労研・社研路線」の総括たる、六〇年代中期以降の我々の労働運動—その実践と、実践的政治的・理論的集約であった「階級的労働運動論」の総体である。

当時、国際共産主義運動は、スターリン主義者による世界党の解体、放棄、ソ連国家による世界人民への経済的・政治的・軍事的抑圧の激化、その結果としてのハンガリー事件の発生、ヤルタ・ジュネーブ体制の支配力の増大、スターリニズム諸党の一斉の平和共存、平和路線への右旋回は、不可避的に、全世界的に新たな共産主義運動の創出を要求した。しかし、この闘いは各国に分断され、偉大なボルシェビキ党的経験と教訓から分断され、出発しなければならなかつたがゆえに、決定的市民主義的、民主主義的性格と、反スターリニズムの諸々の思想的弱点をもつてその第一步を踏み出したのである。

第一次ブンドは、レーニンの遺訓を世界党と世界革命の思想においてかかげ、もつて革共同二派の今日に至るまで抜け出ることでの「侵反共闘」の諸君たちの労働運動路線の「物とり闘争」にわき、経済闘争が経済闘争としての物質的成果をあげることのできた時代でもあつた。ゆえに、「物とり闘争」の組織的指導部が民同の性格であり、かつその存在が、労働組合の中に成立することができた。

経済闘争の表面上の成果、組合主義的政治闘争の表面上の活性化。この過程をとうしてわが国の労働運動は、労働組合から大衆闘争の原則と大衆闘争の戦術、大衆闘争の組織を一握りの組合幹部に奪われ、最も悪質な今日にみる「労働手代」と、資本と国家権力の統治機関とさえ見まがうばかりの組合内統制の諸手段を、自らの頭上にのしかからせるに至つた。プロレタリアートの階級的團結は労働組合の團結へと、労働組合の團結は労働手代の取り引きのための票田の團結へとおしこめられるに至つた。

当時は、今日のわが国の労働運動の実情——社会民主主義者、スターリン主義者と、それに屈する日和見主義者の支配が準備された時代であつた。しかし当時、革命的プロレタリアートは彼らを「ダラ幹」と批判はしてゐるに至つた。

も、これと闘うに、組合内左派反対派、つきあい部隊としてしか自己を組織できず、彼らの「左バネ」へと組織されたとさえいえるのである。

今日においてもなお「かつて革命的プロレタリアートであった者たち」の何と多くが、この敗北の教訓に満ちた「労研・社研」を模倣していることだらうか。彼らの十五年前の我々と異なる点は、いざれにせよ我々は、この敗北を自らの手で突破すべく「階級的労働運動」へと無数のプロレタリア大衆とともに前進したこと、我々は決して党建設の闘いを「不必要なもの」などと一時も考えたことがなかつたこと——これである。

我々は労働手代と資本の重圧の中で、彼らをつきあい彼らを左から批判しつつ日々闘う無数のプロレタリア活動家と、彼らをまるめこむ「組合サークル主義者」を同一視することなど決してしない。「組合サークル主義者」とこそ革命的プロレタリアートは闘わねばならない。ましてや、党建設を口先でつけたす「組合サークル主義者」をいささかも容認し

ロツキズムの根本的な弱点——レーニン主義党建設、レーニン主義党建設に反対するソビエト主義党の立脚点をもちこんだのである。

さらに、当時日本資本主義は敗戦過程を経済的にも、政治的にものりきり、帝国主義的膨張の成長期にあり、労働組合運動の全体が「物とり闘争」にわき、経済闘争が経済闘争としての物質的成果をあげることのできた時代でもあつた。ゆえに、「物とり闘争」の組織的指導部が民同の性格であり、かつその存在が、労働組合の中に成立することができた。

と民主主義＝社会主義なる病根から自由ではあつたが、スターリニズムに対する市民主義的、思想主義的批判のワクを自らにはめ、トロツキズムの根本的な弱点——レーニン主義党建設、レーニン主義党建設に反対するソビエト主義党の立脚点をもちこんだのである。

さらに、当時日本資本主義は敗戦過程を経済的にも、政治的にものりきり、帝国主義的膨張の成長期にあり、労働組合運動の全体が「物とり闘争」にわき、経済闘争が経済闘争としての物質的成果をあげることのできた時代でもあつた。ゆえに、「物とり闘争」の組織的指導部が民同の性格であり、かつその存在が、労働組合の中に成立することができた。

### 3

#### 六〇年代後期、 「階級的労働運動」について

六〇年代後半、我々の「階級的労働運動」

の実践と理論は、以上のごとき自らの第一次ブンド「労研・社研」路線を革命的に突破せんとして組織された我々の直接的な労働運動であつた。そしてこれは同時に、情況、叛旗などとの党内闘争と結合してあつた。

階級的労働運動路線の骨格は次のものであつた。そしてそれは——後に述べる総括との関係で重要なことなのであるが——六五年を期して開始された主として関西における革命的プロレタリアートたちの、労研内左派反対派→職場反戦青年委員会の組織化→組合ヘゲモニーの掌握→大衆的実労働争議の組織化と革命的政治闘争への決起→地区反戦の組織化→地区党的結成→労働者軍事組織の結成、街頭武装闘争、武装反レッドページ闘争→中央権力闘争と地区マッセンストライキへの決起という数年にわたる実践、その英雄的ではあったが自然成長的な闘いを、直接的に対象化しようとしたものであつた。「階級的労働運動」路線の基本的性格は、深くこの事実に規定されてゐるのである。そしてこの点にこそ、現在我々が克服しなければならない、階級的労働運動路線の「転倒」が存在するのである。

「階級的労働運動」路線は、まず社民の「資本家階級打倒の闘い」が、日ましに右傾化する事実の実際の根拠を、社民の政治的力量が全的に依拠する労働組合の力量の弱化に求め、組合主義的政治闘争（そしてこの組合主義的政治闘争が、戦後日本の政治闘争の大きな特徴であったのだが）の破産を宣告する。

さらに自己の「労研・社研」路線の克服をも含め、諸党派の労働運動路線を「組合的団結の徹底した強化の延長上に階級的團結を形成せんとするもの」なる組合主義として批判し、ベトナム反戦闘争の大衆的高揚を条件として、反帝主義を中心スローガンに「反帝統一戦線」の形成とその領導をもつて、労働組合とその社民へゲモニーにかわる階級形成と、そのヘゲモニーとすべきこと。実践的には、全学連と職場反戦を地区反戦に統合再編し、もつて「反帝統一戦線」の中心組織とし、その内部において「コミュニケーション運動の質と原則」が形成されること。このコミュニケーション運動はまた、反帝統一戦線と結合することをもつて「全人民的團結の質」へと強化されること。

てはならない。これこそ、四トロ、日向、社研、紅旗などをはじめ、ややもするとかつての「侵反共闘」の諸君たちの労働運動路線の内実、そこに反映した彼らの「党的内実」なのである。

六〇年代後半、我々の「階級的労働運動」の実践と理論は、以上のごとき自らの第一次ブンド「労研・社研」路線を革命的に突破せんとして組織された我々の直接的な労働運動であつた。そしてこれは同時に、情況、叛旗などとの党内闘争と結合してあつた。

階級的労働運動路線の骨格は次のものであつた。そしてそれは——後に述べる総括との関係で重要なことなのであるが——六五年を期して開始された主として関西における革命的プロレタリアートたちの、労研内左派反対派→職場反戦青年委員会の組織化→組合ヘゲモニーの掌握→大衆的実労働争議の組織化と革命的政治闘争への決起→地区反戦の組織化→地区党的結成→労働者軍事組織の結成、街頭武装闘争、武装反レッドページ闘争→中央権力闘争と地区マッセンストライキへの決起という数年にわたる実践、その英雄的ではあったが自然成長的な闘いを、直接的に対象化しようとしたものであつた。「階級的労働運動」路線の基本的性格は、深くこの事実に規定されてゐるのである。そしてこの点にこそ、現在我々が克服しなければならない、階級的労働運動路線の「転倒」が存在するのである。

### 4

#### 「階級的労働運動」の総括 経済主義・組合主義との闘い

「階級的労働運動」路線は、労働運動を経済闘争と労働組合に閉殺する経済主義・組合主義と闘い、これを労働組合運動から解き放ち、さらにプロレタリアートの政治的決起を組合主義的政治闘争から解き放つことを高らかに宣言した。いまや「階級的労働運動」は直面するプロレタリアートの革命的決起へむけ、自己を「政治的、軍事的、組織的に」武装することへとその実践の基軸をおし広げなければならない。

かつて世界の偉大なプロレタリア革命においても、また今日、我々の直面する革命への実践においても、右翼日和見主義——その本性たる経済主義・組合主義との闘い、とりわけマルクスの言葉をもつてマルクス主義に反対する者との闘いは、最も長期を要する基礎的な闘いである。この闘い、古典的なものは現代特有の闘いをこらした日和見主義との闘いと固く結合することなくして、プロレタリアートは帝國主義と闘うことはできないのだ。右翼日和見主義、それはいくつかの局面で戦術的突出をしないということではない。またそれは、いくつかの戦闘局面で激しく闘わないということでもない。そればかりか、右翼日和見主義は自らをマルクスの弟子だと

烽火

いい、場合によつてはレーニンの弟子だとさえいふのだ。右翼日和見主義の本性は、プロレタリアートの社会主義革命の大道に対する経済主義、組合主義をもつての敵対、マルクス主義の経済主義・組合主義的歪曲にある。

この経済主義・組合主義は、プロレタリアートとその階級闘争が誕生してまもなく、労働運動と議会を主な棲息地としてその活動を開始した。これは歴史的にも、そして今日の労働者大衆の中においても、はじめは素朴な大衆の生きがため食わんがための闘いのスケベとしてあつた。これに対するに革命的のプロレタリアートは、ただ彼らの武器たるべき前衛党と、その目的意識的な領導力の不足にその責を負うのみであった。しかしプロレタリアア大衆の生きがため食わんがための闘いは源初的な、基礎的なものであるがゆえに、ブルジョアジーとその国家権力の攻撃に最も熾烈にさらされざるをえなかつた。とりわけ、労働組合の闘いが前進し、ブルジョア国家における合法性と、一定の社会的勢力を獲得したところでは、このブルジョアジーの攻撃は労働組合を自らの手代で支配することにそのまま作戦を定めるに至つた。文字どうり、「経済主義、組合主義の経済的基盤は帝国主義の主義を歪曲する」となつた。

レーニンの鋭く指摘したごとく、帝国主義の時代以降、この経済主義・組合主義は労働運動におけるブルジョアジーの手代にとどまらず、プロレタリアートの革命運動―共産主義運動にまでその触手をのばし、プロレタリアートへの巨大な敵対戦線を形成するに至つた。彼らは様々に形と姿をかえてたち現われるが、共通してマルクスを歪曲し、レーニン主義を歪曲する。

彼らは結局、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立を、個別資本と貯労働の対立としてしか見ようしない。彼らはプロレタリアートの悲惨と困苦の実情をとらえて、マルクス主義を、たかだかこの実情の告発者へと転落させる。彼らは反帝国主義を口先のこととし、現実の帝国主義の侵略反革命、他民族抑圧を免罪し、プロレタリアの國際主義を踏みにじる。彼らは帝国主義国家権力の暴力を、特に武装したブルジョア独裁権力の反革命武装力としてとらえるのではなく、共和制議会を偶然に支配する非民主主義的政策の、政策的結果にしかすぎないのだといいくるめる。

かくして彼らは、プロレタリアートの必然的な経済闘争とその團結形態たる労働組合を革命の学校、共産主義の予備校へと転化せんとする革命的プロレタリアートの任務の眼前に立ちふさがり、プロレタリアートの闘いと團結を労働組合の中にとじこめ、革命的政治闘争と党建設への決起を妨害する。かくして彼らは、ブルジョアジーとその国家の打倒―

の時代以降、この経済主義・組合主義は労働運動におけるブルジョアジーの手代にとどまらず、プロレタリアートの革命運動－共産主義運動にまでその触手をのばし、プロレタリアートへの巨大な敵対戦線を形成するに至つた。彼らは様々に形と姿をかえてたち現われれるが、共通してマルクスを歪曲し、レーニン主義を歪曲する。

彼らは結局、ブルジョアジーとプロレタリア

アートの階級対立を、個別資本と賃労働の対立としてしか見ようとしない。彼らはプロト・タリアーントの悲惨と困苦の実情をとらえて、

マルクス主義を、たかだかこの実情の告発者へと転落させる。彼らは反帝国主義を口先のこととし、現実の帝国主義の侵略反革命、他民族抑圧を免罪し、プロレタリアの国際主義を踏みにじる。彼らは帝国主義国家権力の暴

力を、特に武装したブルジョア独裁権力の反革命武装力としてとらえるのではなく、共和制議会を偶然に支配する非民主主義的政策の、政策的結果にしかすぎないのだといいくるめる。

かくして彼らは、プロレタリアートの必然的な経済闘争とその團結形態たる労働組合を革命の学校、共産主義の予備校へと転化せんとする革命的プロレタリアートの任務の眼前に立ちふさがり、プロレタリアートの闘いと團結を労働組合の中にとじこめ、革命的政治闘争と党建設への決起を妨害する。かくして彼らは、ブルジョアジーとその国家の打倒――

## 「階級的労働運動」の総括

一武装蜂起とプロレタリア独裁へと発展する  
プロレタリアートの政治的決起を、ブルジョ  
アジーとの取り引き、帝国主義超過利潤のわ  
け前の要求と、民主主義的改良の要求のため  
の闘い——組合主義的政治闘争、議会主義的  
政治闘争へとひきずりこもうとするのだ。  
我々は、第三章でのべるよう、労働組合  
とその闘いの中における党と革命的プロレタ  
リアートの決定的任務を断固としてにない、  
必ず右翼日和見主義者——労働手代をたたきだ  
し、革命の学校、共産主義の予備校たる労働  
運動を創出する。したがって我々こそが、か  
つての「階級的労働運動」が左翼小児病的弱  
点を有していくことを誰よりも知っている。  
しかしそれは、右翼日和見主義者たちがおの  
れの経済主義・組合主義を隠蔽するために、  
まったく解党主義的にレーニンを利用してした  
「左翼小児病」をもつての我々への非難ゆえ  
ではない。それは、「中間連合政府」官僚的  
警察的独裁支配攻撃」と真正面から闘いぬき、  
準備されるファシズムと侵略反革命戦争を、  
計画されたプロレタリアートの武装蜂起とブ  
ロ独権力樹立にとってかわらせるためにこそ  
なのだ。

プロレタリアートの革命の偉大な歴史は、フランス革命におけるコミニーン、ロシア革命におけるソビエトを創出した。それは革命的プロレタリアートと、その領導のもとに決起した被抑圧人民の武装蜂起の大衆機関であり、プロレタリア独裁の大衆機関であった。それは大衆の自然成長性の最大の高揚にもとづく團結であり、大衆の英雄精神、自己犠牲と連帶と、革命的創意のもつとも強固な組織であった。

ロシアにおいて一九〇五年の革命に発生したソビエトを、レーニンとボルシェビキ党は、その革命の事業における歴史的性格をこのように見ぬき、これをその自然成長性にゆだねるのではなく、武装蜂起とプロレタリア独裁の目的意識的機關へと高めるため、全力を注入した。その全過程は、ソビエトの中に多数

ソビエト主義、すなわちレーニン主義党建設と戦術、ひいては、プロレタリア独裁をめぐるスターリニズムとの闘いにおける日和見主義は、かつての「階級的労働運動」路線の最大の敗北の原因であつたとともに、今日におけるカウツキー主義者たち、四トロ、日向、プロ青などの路線的本性なのだ。

これは入れかわり立ちかわり、姿を変え、形を変え、おそらくはプロレタリアートが政治権力を樹立してからも育成されてくるだろう。我々はこれと激しく闘わねばならない。かつて「階級的労働運動」において、我々はこれとの正面戦を宣告し、かつ闘いぬいてきた。その闘いは「階級的労働運動」の地平をはるかにこえて前進し、いまや労働運動内における闘いのみならず、直面する革命へむけての総路線の闘いとしてある。労働運動をこの目的意識的な地平からとらえる時、我々ははじめて現下の労働運動をめぐる右翼日和見主義との闘いを、経済主義・組合主義と強く密接した革命における日和見主義——ソビエト主義との闘いへ、ぜひとも絶対させねばならない。

## 烽火

トの武装に溶解させる。ソビエト主義者は、一国の革命を全世界の革命へと発展させるためのレーニン主義者の闘い、全世界の単一のプロレタリア独裁権力樹立の闘いに反対し、世界革命を一国ソビエト権力の総和におとしこめる。

総じてソビエト主義者は、階級の團結をソビエトの指導におとしとどめ、党的任務をソビエトの指導におとしとこめ、もつてレーニン主義前衛党建設に敵対する。

マルクス主義は、その誕生後まもなく、科学的社会主义の思想的学説的段階から、現実のプロレタリアートの指導実践に入るや、断固として暴力革命の旗をかげつけ、その不可避性は増大こそそれ減少することはなかつた。帝国主義が資本主義世界の支配的段階となつてから、この暴力革命は、プロレタリアートの解放にとって、特別の重大な問題となつた。それは、帝国主義がプロレタリア内部に送りこんだ平和革命の幻想、社会主義へのブルジョア民主主義的移行の幻想との闘いが、革命的危機の成熟とともに、プロレタリアートの焦眉の問題となつたからである。レーニンのカウツキーとの熾烈な党派闘争、これは今日、ますます増大する今日の党派闘争である。

世界のすべての革命は、暴力革命を、革命の軍隊の建設と武装蜂起、革命戦争という具体的実践として遂行する以外に、ただひとつの例外的成功をも残していない。それは今日の資本主義が、全世界的反革命軍事力としてしか延命する道をもたないからであり、現実のこのブルジョア民主主義共和国が、抽象的なブルジョア独裁などではなく、特殊に武装した人間による暴力装置だからである。

この敵にうちかつこと、それはもつとも意識的な革命的プロレタリアートの特別の組織——プロレタリア階級の團結の最高の質へと自己をうちきたえたレーニン主義党のもと、圧倒的なプロレタリアートが、武装蜂起——人口獨のための正規軍にまで組織されることなくして、そして、この正規軍を中心とした长期の革命戦争に勝利することなくしてありえない。

ソビエト的團結は、この正規軍、すなわち建設すべき赤軍のもつとも中心的な選出母体であるし、赤軍の戦闘のもつとも中心的な補完戦闘力でもある。しかしソビエトの武装は、党のもとに組織された赤軍に代わることはできなかつたし、できないのだ。ソビエトは、党的物理力ではなく、革命的大衆の團結として組織されねば、その歴史的な存在の根拠がなくなるのであり、そうである限り、革命の軍事においても政治においても、個別性、地方性、民族性を色濃くもたざるをえないのである。

ゼネラルストライキ——もちろんのこと、武装せざるゼネストといふ空ストは論外にし

て、武装ゼネスト、これはかつてそうであつたように、そして我々の直面する革命においてもそうであるだろうように、武装蜂起——内戦のもつとも大衆的な戦闘形態であり、そのもつとも巾広いすそ野として計画的に組織されねばならない。それは戦争の重要な力の一部であるとともに、大衆を武装蜂起——内戦へと教育する最初の兵営でもある。しかし武装蜂起の正規軍とその攻撃を粉碎することはできないのだ。

同志諸君！我々はソビエトに関する我々の原則的立場をごく簡略ではあるが明らかにしてきた。労働運動、やがてまもなく革命的危機の成熟とともに、わが国の労働運動はその発展のうちに、ソビエトの建設を直接的な課題とする日を迎えるであろう。これを大衆の武装蜂起の機関、プロレタリア独裁の機関へと領導するために、革命的プロレタリアートは今日から闘わねばならない。それは労働運動を決して労働組合の運動の中に閑殺しないこと、自己の任務を労働組合の指導から展望するといふ転倒ではなく、階級深部に配置された武装蜂起——プロ独の指令部として自己を組織し、ここから、現実の労働運動への目的意識的指導をなすといふ闘いから開始されねばならない。この闘いのため我々は、ソビエト主義に関する最後の検討、ソビエト主義との闘いについて触れねばならない。

ソビエト主義の実践的性格については、先に述べた。今日、このソビエト主義の実践的性格は、第一に、右翼日和見主義のうち、もつとも危険なカウツキー主義者によって利用され、多くの闘わんとするプロレタリアートを「私たちは武装闘争を否定していい」。暴力革命を否定していい」なるペテンでまとわせ、やがては、カウツキー主義者と眞の野合をとげる。第二に、スターリニズムに利用され、社会主義の唯一の道、世界党の建設とタリア独裁を、たかだか一国における労働者政府と、その民主主義政策の問題におとしめようとする。こうしてソビエト主義者は、やがてスターリニズムと野合をとげる。この二つは、資本主義とその国家の延命のための「中間連合政府」官僚的警察的独裁支配」をめぐる、帝国主義と社会帝国主義の野合に参列し、その左足補完物になることを最高の名譽とするといふ転落に帰結するのだ。

ソビエト主義者らの路線上の根本的性格、このような実践的結果を生み出す根本的性格は、反レーニン主義、何よりも党的任務をめぐるの質を党として組織すること。党的根本的任務を、階級の死滅に至るまで、共産主義を実現する階級闘争の指導としてなすことにある。

レーニン主義こそ大衆の決起と大衆の力に依拠するものはない。レーニン主義ほど、大衆の結集なくして武装蜂起もプロ独も不可能なことを主張するものはない。だからこそレーニン主義は、右翼日和見主義やソビエト主義者に對して、「党的武装蜂起・党的プロ独」を高らかにかけるのだ。

右翼日和見主義者は、プロレタリアートの團結を労働組合の團結、党を労働組合運動の援助・助力の機能だと考える。そしてソビエトの指導部としか見ようとはしないのだ。

ソビエトは発見されたプロレタリア独裁期の国家形態である。しかしプロ独国家は、どこまでもプロレタリア独裁の道具でしかない。しかしスターリニズムにあっても、ソビエト主義者にあっても、結局プロ独国家が目的にするかわる。だから彼らの双方にとつて社会主義とは、このプロ独国家の政策とこれを実行するテクノクラートのことであり、これを保障するものは生産力といふことになるのだ。

彼らが「中間連合政府」に浮き身をやつし、現下の労働運動を「中間連合政府」の票田へひきずりこもうと試みる路線的理由である。最後にこの章をおわるにあたり、「階級的労働運動」のおちいだ左翼小児病について我々の基本的立場を明らかにしておかねばならぬ。

たしかに「階級的労働運動」は、その理論においても実践においても、革命的プロレタリアートの労働組合内における活動と任務を否定し、そこから戦士を召還することを主張したわけではなかつた。この点ではむしろ、12·18路線下における神奈川左派、赤報派が左翼小児病に深くおちいっていた。しかし左翼小児病は、それがしてかかつての「階級的労働運動」が、たことは事実であり、これと闘いえなかつたこともまた事実である。それは当時の第二次ブンド的戦略戦術の党的内容の反映であり、とりわけ帝国主義を見て資本主義を見ないという誤り、武装闘争を見て武装蜂起を見ないといふ誤り、武装闘争を見て武装蜂起を見ないといふ誤り、総じて、路線と党建設におけるレーニン主義の決定的な不充分さの結果であった。我々はこの問題を二章と三章でとりあげ、これを突破する30·1号路線下での労働運動の基調を明らかにする。

(次号につづく)